

長崎医学専門学校・医科大学で学んだ留学生とその特色
—千葉医学専門学校・医科大学留学生との比較—

見城 悌治

千葉大学国際教養学部

International students who studied at the Nagasaki medical school/Medical College
and their special features
—Comparison with Chiba Medical School/Medical College's International students—

KENJO Teiji

要旨

近代日本で医学薬学を学んだ中国留学生を最も受け入れていた学校は、千葉医学専門学校・医科大学であった。そして、これに次ぐ第二位の受け入れ校とされているのは、長崎医学専門学校・医科大学である。筆者は、これまで千葉医専・医大の事例をまとめ、留日医薬留学生の諸相の一端を明らかにしてきた。本稿では、長崎医専・医大の留学生名簿を作成し、その特色を検討した。そして、千葉との比較も適宜加えた。その概要を述べれば、長崎医専・医大において、受け入れた外国人学生数は延べ239名（中国以外も含む）とかなりの数にのぼったこと、1930年代半ばから台湾留学生が急増したこと、欧州の学生も若干名であるが在籍していたことなどである。

今後は、医薬留学生を受け入れた他の学校についての整理、さらに比較を行い、近代日本で学んだ医薬留学生の全体像を描き出すことが課題となる。

キーワード

留学生、医学、薬学、辛亥革命、日中関係

はじめに

筆者は、2018年3月、『近代日本で留学生は何を学んだか—医薬・園芸・デザイン・師範』（日本経済評論社）を発表した。拙書のひとつの柱は、千葉大学医学部・薬学部の前身校である千葉医学専門学校（1901～1922年；以下「千葉医専」）、千葉医科大学（1923～1947年；以下、「千葉医大」）時代に受け入れた留学生の動向をめぐる整理であった。

日露戦争後、急増した清国（以下、原則的にすべて「中国」を用いる）からの留学生を受け入れるため、官立の五校（第一高等学校、東京高等師範学校、東京高等工業学校、山口高等商業学校と千葉医専）が、1908年から15年間、中国各省政府の奨学金を得た学生を受け入れる協定を結んだ。そのためもあり、1930年に、中国の医薬界で活躍している元留日学生（789名）の出身校を調べた調査⁽¹⁾によれば、一位は千葉医大卒業の154名で、全体の2割を占めていた。そうした事情があるため、千葉医専・医大時代の留学生を精査することは、とりわけ中国との知的交流の関係を知るため、きわめて興味ある素材を提供してくれるのである。

しかし、千葉OBの事例だけで、留日医薬留学生のすべてを代表させる訳には勿論いかない。上記の調査に基づけば、帰国留学生の第二位は長崎医大の102名、三位は東京帝大医学部の92名であった。近代日本で学んだ医薬留学生の実態把握を目指す場合には、千葉に続いて、長崎医専・医大の戦前戦中期の留学生の実態をまとめる必要があるだろう。本稿はそれを目的とする。

そのために本稿で用いた史料は、戦前期の官立学校が自らの概要（在籍学生の個人名を含む）をデータとして公表していた「××大学一覧」、今回の場合は『長崎医学専門学校一覧』および『長崎医科大学一覧』の各年版である⁽²⁾。そこに掲載されている「在籍学生名簿」および「卒業生名簿」から、長崎医専・医大の「留学生名簿」を作成し、その特色をまず明らかにする。それを補完する史料として、興亜院政務部が1940年10月に発刊した『日本留学中華民国人名調』の長崎医専・医大の項目も用いている。次いで、筆者が既にまとめ終えた千葉医専・医大の特色と比較することにより、両校の留学生受け入れの異同を確認し、近代日本の医薬留学生受け入れの特質を改めて整理していくことが、本稿の課題となる。

1. 長崎医学専門学校・医科大学における留学生受け入れの特色

①長崎大学医学部・薬学部の歴史

長崎大学医学部は、その起源を、長崎奉行所西役所の医学伝習所で、オランダ海軍軍医・ポンペ・ファン・メールデルフォルトが医学伝習を開始した1857年（安政4年）11月12日を、開学記念日としている⁽³⁾。その後、1861年（文久元年）に新設された養生所に医学所が併設された。1868年（明治元年）には、長崎府医学校と改称、その後、1874年に長崎医

学校、1888年に第五高等中学校医学部と、複数回の改名の後、1901年官立長崎医学専門学校へ、1923年には長崎医科大学に転じた。

薬学部は1890年、第五高等中学校医学部に薬学科が創設された6月18日を記念日としている。その後は長崎医学専門学校薬学科（1901年）へ、1923年には長崎医科大学附属薬学専門部（1923年）となり、1949年に、それぞれ新制長崎大学の医学部と薬学部になった。

1901年に「官立医学専門学校」になってからの経緯は、千葉医専・医大と全く同じである。しかし、千葉がその創始を1874年の千葉町共立病院にみている⁽⁴⁾のに対し、幕末のオランダ医師・ポンペの伝習開始におき、彼を「開祖」としていることは、歴史の起源を何に置くのかについてそれぞれ興味深い問題を有する。また、千葉医科大は1945年7月の空襲で被災しているが、8月9日の原爆投下が、浦上にあった長崎医大をほぼ全壊せしめ、850名もの犠牲者を出したことは筆舌に尽くしがたい惨事として明記しておきたい。

②長崎医専・医大で学んだ留学生たち

『長崎医学専門学校一覧』および『長崎医科大学一覧』（1942年発刊分まで）から作成した留学生一覧を表1として示した。本表の順列については、最上位のカテゴリーに入学年を置き、次に医薬の別、その下に国別。国別の中では、卒業年次ごとに並べ、中退者は下位のカテゴリーに置いた。

凡例は以下のとおりである。

- ・「国別」欄の数字の頭に、「K」と付けたのは韓国（朝鮮）出身者、「T」は台湾、「M」は「満州国」、「I」はイタリア、「ト」はトルコ出身者である。何も付していないのは中国出身者である。
- ・「医薬」欄の無記載は、「医学」専攻者であることを示す。また「臨医」は、戦時対応のため、1939年から新たに設けられた「臨時附属医学専門部」に在籍していたことを示す。
- ・「卒業年」の「退」は「中退」の略である。また用いた史料が「1942年版」までであるため、1944年以降に卒業したか中退したかは不明であるため、すべて「-」を入れている。
- ・「出身地」欄においては、「中国」とだけあるものと省名が書かれているものなどが不揃いになっているが、これらはすべて参照した『一覧』の記載に従った。
- ・「備考」欄の「職業」や「学位取得」などについても、すべて『一覧』に載っているものだけを書き加えている。中退者が明確な人士の職業欄には「-」を入れ、『一覧』上で「未詳」と明記してあった人士の項目には「未詳」とそのまま明記している。
- ・「出身地」や「職業」については、『日本留学中華民国人名調』（興亜院、1940年）からの情報も加えた（なお、同書には79名の名前があげられている）。

なお、備考欄に1935年度から現れる「専攻生」について、『長崎医科大学一覧』の1935年版を参考に、その規程を紹介しておく⁽⁵⁾。まず、「長崎医科大学専攻生規程」は「昭和九年（1934）年三月二十九日許可」、「昭和九年十月」改正がなされたもので、新たに作られた身分であった。第一条は「本学ニ於テ、特殊ノ事項ニ就キ、研究セントスル者ハ、専

表1 長崎医学専門学校・長崎医科大学時代の留学生名簿（1905～1942年）

番号	国別	医業	名前	入学年	卒業年	出身地	備考（勤務先等）
1	1		戴棣齡	1905	1909	江蘇省	開業医→支那軍医学校教務長
2	2		徐 樑	1907	1913	江蘇省	南京病院
3	3		陸宗翰	1907	1914	浙江省	東京中国大使館→北京在住
4	4		倪紹雯	1907	1908退	中国	—
5	5		孫 銘	1907	1908退	中国	—
6	6		于 琛	1907	1908退	中国	—
7	7		孫家樹	1907	1908退	中国	—
8	8		李 勳	1907	1908退	中国	—
9	9		陳 榻	1907	1908退	中国	—
10	10		于 璟	1907	1908退	中国	—
11	K1		鄭寅濠	1907	1910退	韓国	—
12	11	業	姚利緒	1907	1908退	中国	—
13	12		田丙午	1908	1914	浙江省	山東省病院
14	13		鄭鳴鎮	1908	1914	河南省	北京国立医学専門学校教授→ 河南省・芳州医院
15	14		劉輔察	1908	1914	湖南省	湖南省立病院
16	15		吳震寰	1908	1909退	中国	—
17	16	業	葉秉衡	1908	1911	江蘇省	ドイツ留学→上海・五州固本造諸廠
18	17	業	戴伺齡	1908	1911	江蘇省	天津軍医学校病院薬局長
19	18		斯 明	1909	1914	浙江省	浙江省医学専門学校教授
20	19		胡 澄	1909	1914	浙江省	江蘇省医学専門学校教授
21	20		朱榮錦	1909	1915	江蘇省	江蘇省医学専門学校教授
22	21		舒元馨	1909	1915	山東省	山東省衛生課課長
23	22		周 埈	1909	1914退	中国	—
24	23	業	金体選	1909	1913	浙江省	内務部簽事→山西省教育厅
25	24	業	蕭也規	1909	1913	湖南省	湖南測繪学校教授→漢口精塩公会
26	25	業	劉輔定	1909	1913	湖南省	湖南測繪学校教授
27	26	業	林維周	1909	1913	浙江省	寧波開業医
28	27	業	戚学綉	1909	1913	山東省	北京在住
29	28	業	陶 铸	1909	1913	浙江省	北京国立医専学生監
30	29	業	丁維駢	1909	1914	浙江省	開業
31	30	業	唐兆槐	1909	1913退	中国	—
32	31		憑祖昭	1910	1915	浙江省	浙江省医学専門学校教授
33	32		蕭蔚霞	1910	1915	湖南省	湖南省陸軍衛戍病院院長
34	33		蔣志新	1910	1915	浙江省	嘉興府立病院院長→徳心医院
35	34		劉 炎	1910	1916	江蘇省	未詳
36	35		章啓祥	1910	1912退	中国	—
37	36	業	周軍声	1910	1914	山東省	浙江省医学専門学校教授→ 北京大学医学院教授
38	37	業	張 楷	1910	1914	湖北省	湖北省医学専門学校教授
39	38	業	李寿康	1910	1914	広東省	未詳

40	39	葉	羅工亮	1910	1915	四川省	開業
41	40	葉	黃桂旗	1910	1911退	中国	—
42	41	葉	鄭典	1910	1913退	中国	—
43	42		趙翰思	1911	1916	直隸省	直隸省保定府府立專門學校教授→ 南京陸軍軍醫學校教官
44	43		陳憲	1911	1916	湖北省	漢口智民里共濟醫院
45	44		趙鑄	1911	1916	江蘇省	鎮江·弘仁醫院
46	45		張炳光	1911	1912退	中国	—
47	46		黃王衡	1911	1913退	中国	—
48	47		陳代堃	1911	1913退	中国	—
49	48		江衡	1911	1914退	湖北省	—
50	49	葉	薛光釗	1911	1915	江蘇省	北京國立醫學專門學校教授→ 陸軍軍醫學校教官
51	50	葉	黎頌蓮	1911	1915	廣東省	香港在住
52	51	葉	蔡東賢	1911	1915	江蘇省	漢口市立醫院
53	52	葉	沈瑾	1911	1915	江蘇省	漢口在住
54	53	葉	胡安榮	1911	1912退	中国	—
55	54		顧耆	1913	1917	浙江省	上海·壽自醫院
56	55		洪元晦	1913	1913退	中国	—
57	56		徐世英	1913	1914退	江蘇省	—
58	57	葉	張藩	1913	1917	湖北省	江蘇省醫學專門學校教授
59	58	葉	呂燮	1913	1914退	中国	—
60	59		程立	1914	1918	浙江省	慶應醫大→橫濱中華民國領事館
61	60		斯榮	1914	1918	浙江省	県立長崎病院
62	61		王綸	1914	1918	江蘇省	天津·新華醫院
63	62		鄧榮光	1914	1918	廣東省	青島市警察局保安科衛生股長
64	63		王葆明	1914	1915退	浙江省	—
65	64	葉	徐溥衡	1914	1917	廣西省	河南省省立病院醫師
66	65		馬鐘鈺	1915	1919	陝西省	陝西省城紅十字會→陝西陸軍醫院
67	66		方聲潘	1915	1919	福建省	福建省寄慶醫院→聲潘醫院
68	67		張任華	1915	1919	江西省	青島市衛生局長
69	68		劉輝光	1915	1919	雲南省	雲南省城陸軍病院→昆明·大同醫院
70	69		上官悟塵	1915	1919	河南省	直隸省保定醫學專門學校→ 河南大學醫學院教授
71	70		李世圻	1915	1920	湖南省	廣東省博愛會病院
72	71		耿熙麟	1915	1920	奉天省	奉天省日本赤十字病院
73	72		許贊猷	1915	1921	江西省	江西省立南昌醫專教授
74	73		吳塵	1915	1918退	河南省	—
75	74	葉	倪守仁	1915	1918	雲南省	昆明·東港醫院
76	75	葉	鄧晶	1915	1918	雲南省	昆明·陸軍醫院
77	76		張德輝	1916	1920	雲南省	県立長崎病院外科→上海·東方醫院
78	77		明增齡	1916	1920	雲南省	県立長崎病院內科→廣東醫專教授
79	78		王一林	1917	1921	江蘇省	青島市海務局檢疫科科長

80	79		薛 健	1917	1921	陝西省	青島・強初医院
81	80	葉	戚景藩	1917	1920	雲南省	雲南省城陸軍病院
82	81	葉	陳景伊	1917	1920	浙江省	未詳
83	82	葉	馬鐘哲	1917	1921	陝西省	大連市在住
84	K2	葉	李応吉	1917	1920	平安北道	未詳
85	83		周樹彬	1918	1922	広東省	ハルピン・周済医院 (帰化し「多比良雅雄」)
86	84		王 仁 (煥琪)	1918	1922	陝西省	上海在住
87	85		甄碩琪	1918	1922	広東省	長崎市在住 (帰化し「小林博光」)
88	86		趙中天	1919	1923	山東省	青島市警察診療所主任医官
89	87		李東園	1919	1923	吉林省	
90	88		胡廷禎	1920	1924	江西省	江西省立南昌医専教授
91	89		王世楷	1920	1924	四川省	
92	90		王稚榮	1920	1924	四川省	河北省・南日医院
93	91		孫啓世	1920	1924	吉林省	
94	ト1		エ・ゼ・コーン	1920	1924	トルコ	
95	92		謝康世	1921	1925	四川省	山東省・淄川医院
96	93		沈禎鋨	1921	1925	福建省	
97	94		周曾祐	1921	1925	雲南省	南京・婦女医院
98	95		何紹経	1921	1925	広東省	長崎県時津村・開業医
99	96		蘭晋祥	1921	1925	山西省	
100	イ1	葉	ウゼニョ ウルソー	1924	1928	イタリア	
101	97	葉	孫雪民	1924	1927	吉林省	
102	T1	葉	李義人	1924	1928	台湾	
103	98		沈 徳	1925	1929	江蘇省	北京在住、1936年博士号
104	99		魏怡春 (特)	1925	1930	福建省	北京国立大学医学院教授、1941年博士号
105	100	葉	王裕昌	1925	1929	雲南省	上海在住
106	101	葉	闕 棖	1925	1929	吉林省	
107	T2	葉	林紀煌	1925	1929	台中	
108	T3	葉	黄興成	1925	1926退	台湾	
109	102	葉	沈季璐	1925	1928退	雲南省	
110	103		彭乃琦 (特)	1926	1931	江西省	
111	104		陳觀光 (特)	1926	1931	広東省	香港在住
112	105		羅致徽 (特)	1926	1932	広東省	広東・真理医院
113	106	葉	祖 晨	1926	1927退	雲南省	—
114	107		沈 恭 (特)	1927	1932	江蘇省	上海・沈氏兄弟診所
115	108		沈 良 (特)	1927	1933	江蘇省	上海・沈氏兄弟診所
116	109		王握瑜 (特)	1929	1933	湖南省	
117	110		王秀馥 (特)	1929	1934	浙江省	南通大学小児科教授
118	111		林登発 (特)	1929	1934	福建省	
119	112		何振廉 (特)	1929	1931退	湖南省	—
120	T4		陳進東	1929	1933	台北	
121	T5		李浚仁	1929	1933	台中	—

122	I13		張天曦 (特)	1930	1934	湖北省	同仁会北京医院
123	I14		林慶余 (特)	1930	1934	福建省	北京在住
124	I15		莊静宗 (特)	1930	1935	福建省	
125	I16		詹晟訓 (特)	1930	1936	福建省	鞍山・満鉄病院医員
126	T6		邱鼎宗	1930	1934	台湾	
127	T7		楊友登	1930	1934	台湾	
128	T8	葉	黃連有	1930	1933	台湾	
129	T9		林雲川	1931	1935	台湾	
130	T10		詹元初	1931	1935	台湾	
131	I17	葉	沈 儉 (特)	1931	1934	江蘇省	武田長兵衛商店天津出張所
132	T11		張嘉英	1932	1936	台湾	
133	T12		沈水雲	1932	1936	台湾	
134	T13		林大舜	1932	1936	台湾	
135	T14		李克承	1932	1936	台湾	1941年博士号
136	T15		郭万壹	1932	1936	台湾	
137	K3		朴健欽	1932	1936	朝鮮	
138	T16		蘇邱崧	1933	1937	台湾	
139	T17		翁秋水	1933	1937	台湾	
140	T18		周百鍊	1933	1937	台湾	
141	T19		朱彩陽	1934	1938	台北	
142	T20		陳麗水 (山岡浩一郎)	1934	1938	台北	1941年博士号
143	T21		郭德意	1934	1938	台北	
144	T22		何林茂 (林茂)	1934	1938	台北	
145	T23		林松卿	1934	1938	台中	
146	T24		林逢沅	1934	1938	新竹	
147	T25		陳正中	1935	1939	台湾	
148	T26		楊錦章	1935	1939	台湾	
149	T27		余錦泉	1935	1939	台湾	
150	T28		吳錫胤	1935	1939	台湾	
151	T29		林合成	1935	1941	台中	
152	I18		劉紀元	1935	1936修了	江蘇省	専攻生 (内科)
153	I19		謝強哉	1935	1937修了	湖南省	専攻生 (内科)
154	I20		陳志藻	1935	1937修了	山東省	専攻生 (医化学)
155	I21		蘇祖郷	1935	1937修了	江蘇省	専攻生 (内科)
156	M1		金鴻潤	1935	1936修了	満州吉林	専攻生 (内科)
157	M2		馬元豊	1935	1936修了	満州吉林	専攻生 (外科)
158	M3		李彤嘉	1935	1936修了	満州吉林	専攻生 (皮膚科)
159	M4		王樹華	1935	1937修了	満州吉林	専攻生 (外科)
160	T30	葉	康封印	1936	1939	台南	
161	T31	葉	劉火祥	1936	1939	新竹	
162	T32	葉	呂革令	1936	1939	新竹	
163	K4		文致淳	1936	1937修了	朝鮮	専攻生 (薬理学) / 1938年博士号

164	122		王光華	1936	1937修了	中国	専攻生（内科）
165	T33		鐘壁和	1937	1941	台湾	
166	T34		蕭秀河	1937	1941	台湾	
167	T35		陳麗澤 (山岡幸三郎)	1937	1941	台湾	
168	T36		陳漢升	1937	1941	台湾	
169	T37		楊友香	1937	1941	台湾	
170	T38	薬	蔡湾潭	1937	1940	台湾	
171	T39	薬	王万龍	1937	1940	台湾	
172	T40	薬	康嘉音	1937	1940	台湾	
173	T41	薬	郭振隆	1937	1941	台湾	
174	T42	薬	吳源泉	1937	1941	台湾	
175	123		王宝山	1937	1937修了	中国	専攻生（皮膚泌尿科）
176	T43		彭明哲	1938	1941	台北	
177	T44		王光柱	1938	1941	台北	
178	T45		林忠実 (二木忠実)	1938	1941	台北	
179	T46		呂雲竜	1938	1941	台北	
180	T47	薬	吳福順	1938	1941	台北	
181	T48	薬	周蔵修 (武良富蔵)	1938	1941	台北	
182	T49	薬	黄耀宗	1938	1941	台中	
183	T50	薬	廖国棟	1938	1941	台南	
184	T51		康封印 (安田正彦)	1939	—	台湾	160と同一人物
185	T52		呂革令	1939	—	台湾	162と同一人物
186	T53		蔣松輝	1939	1940退	台湾	—
187	K5		安鎮英 (安田昌平)	1939	—	朝鮮	
188	T54	臨医	柯敦伝	1939	1943	台湾	
189	T55	臨医	黄世超	1939	1943	台湾	
190	T56	臨医	李雙進	1939	1943	台湾	
191	T57	臨医	陳坤木	1939	1943	台湾	
192	K6	臨医	金基業	1939	1943	朝鮮	
193	T58	臨医	林安東	1939	—	台湾	
194	K7	薬	金瓚求 (波多野信次)	1939	1941	朝鮮平南	
195	T59	薬	王文其	1939	1941	台湾	
196	T60	薬	許志堯	1939	1941	台湾	
197	T61	薬	林玉馨	1939	1941	台湾	
198	T62	薬	謝清雲	1939	1941	台湾	
199	T63	薬	林中鳳	1939	1941	台湾	
200	T64		郭万壹	1939	1942	台湾	専攻生（精神科）／136と同一人物

201	T65		蔡湾潭	1940	—	台湾	
202	T66		康嘉音	1940	—	台湾	
203	K8		金清溟 (金光清)	1940	—	朝鮮	
204	T67	臨医	吳威烈	1940	—	台湾	
205	T68	臨医	王沛霖 (岩岡忠雄)	1940	—	台湾	
206	T69	臨医	葉有仁	1940	—	台湾	
207	T70	臨医	吳威力	1940	—	台湾	
208	T71	臨医	黃過伝	1940	—	台湾	
209	T72	臨医	周积新	1940	—	台湾	
210	T73	藥	蘇百齡	1940	—	台湾	
211	T74	藥	戴懷德	1940	—	台湾	
212	K9	藥	曹国鉉 (曹根国鉉)	1940	—	朝鮮平南	
213	124		潘一清	1941	—	中国	
214	T75		吳福順	1941	—	台湾	
215	T76		王斌雄	1941	—	台湾	
216	T77		楊瑤麟	1941	—	台湾	
217	T78		葉国慶	1941	—	台湾	
218	K10		神島昌興	1941	—	朝鮮	
219	K11		金谷寿吉	1941	—	朝鮮	
220	T79		廖東耀	1941	—	台湾	專攻生 (皮膚泌尿器)
221	T80	臨医	黃垂柳	1941	—	台湾	
222	T81	臨医	黃永超	1941	—	台湾	
223	T82	臨医	東山英一	1941	—	台湾	
224	T83	臨医	永光英佑	1941	—	台湾	
225	T84	藥	楊彦彰	1941	—	台湾	
226	T85	藥	趙世文	1941	—	台湾	
227	T86	藥	楊敏鄉	1941	—	台湾	
228	T87		吳源泉	1942	—	台湾	
229	T88		王文其	1942	—	台湾	
230	T89		黃耀宗	1942	—	台湾	
231	T90		陳新賜	1942	—	台湾	
232	T91		林益松	1942	—	台湾	
233	K12		原田相奎	1942	—	朝鮮	
234	T92	臨医	張欽南	1942	—	台湾	
235	T93	臨医	劉有德	1942	—	台湾	
236	T94	臨医	林政吉	1942	—	台湾	
237	T95	藥	何振欽	1942	—	台湾	
238	T96	藥	邱鴻章	1942	—	台湾	
239	K13		長置盛保	1942	—	朝鮮	1942年博士号

攻生トシテ入学ヲ許可ス」とし、第二条で「専攻生タラント欲スル者ハ、願書ニ研究事項ヲ具シ、履歴書及卒業証書写ヲ添へ、学長ニ願出ヅベシ」とされた。第三条は指導教員にかかる内容だが、第四条には、「専攻生タルコトヲ得ル者ハ、左ノ一ニ該当スル者ニ限ル。一 大学又ハ医学専門学校ノ卒業者、二 医師又ハ其ノ資格ヲ有スル者、三 学長ニ於テ、適当ノ学力アリト認メタル者」と、専攻生になる条件が示されていた。また、在籍は2年以内を原則とするが、延長も認める等の規程（第五条）も明記されていた。

留学生（外国人研究者）がどの項目の対象として「専攻生」となったのかは不明だが、博士号を取得した人もいたので、研究蓄積やテーマを明確に持っている医学者がこの身分を得たものと推察している。

なお、名簿中に「魏怡春（特）」のごとく、「（特）」印がついた学生が、1925年から1931年入学生まで、15名存在する。しかも、すべて中国学生である。この時期「特別」な身分が存在した可能性があるが、この前後の「規程」や『一覽』において、格別な説明を見つけることができなかった。医学専門学校から医科大学に移行する際の措置と思われるが、この点は今後の課題となる。

さて、筆者がまとめた名簿から明らかになる長崎医専・医大留学生の特色をまとめておこう。

1) 国・地域別

1905年に入学した中国（清国）留学生を第一号とし、1942年までに、留学生の総数は延べ239名にも上った。国・地域別では、中国が124名で最多勢力となった（全体比52%）が、台湾出身者が96名（40%）もいた点に一つの特色を見出すことができる。第三位は朝鮮の13名（5%）、第四位は「満州」で4名。それに加え、トルコとイタリアの学生がそれぞれ1名学んでいた。

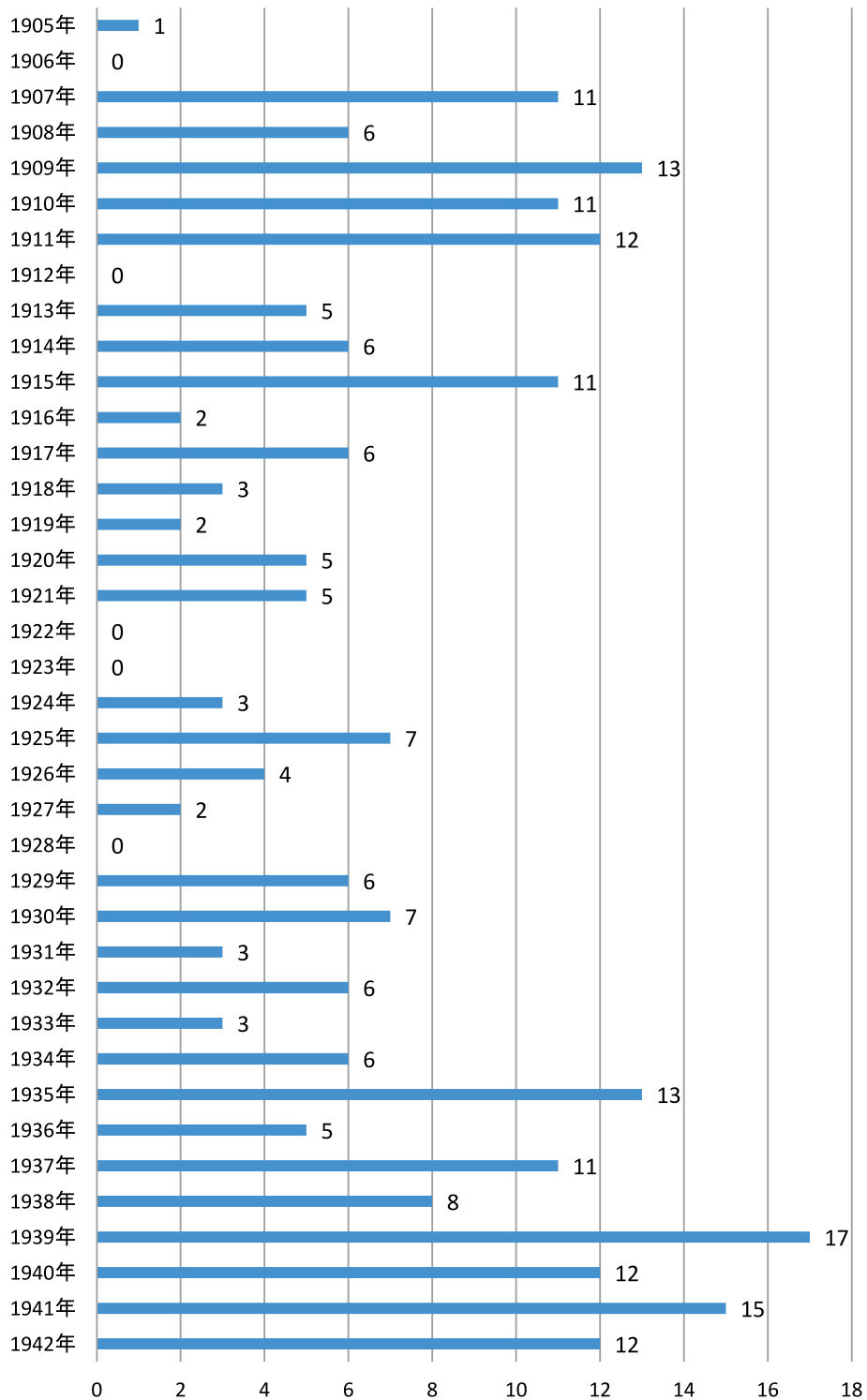
なお、この「239名」は、専攻生13名、臨時附属医学専門部19名および博士号のみの取得者（239番）1名を加えた数値である。筆者が作成した千葉医専・医大の留学生名簿では（参照した史料中にそれらが明示されていなかったこともあり）、原則的にそれらはカウントしていない。つまり、千葉医専を扱った拙稿の表示方式と合わせるならば、「204名」とも言えることを付言しておきたい。

2) 入学年次別

表2は、年次別の入学者の変遷である。日露戦後からの数年が、戦前期において、中国人留学生が最多（1万数千人）であった時期と言われる⁽⁶⁾が、長崎においても、1907年から11年にかけて、10名前後がそれぞれ入学していた。しかし、辛亥革命の影響で1912年はゼロとなる。革命後は1915年の11名をピークに、5名前後の時期が20年余り続く。しかし、1935年以降は、10名を優に越える入学者が1942年まで続くこととなる。

年次別入学者を国・地域別に分けて示したのが、表3である。これによれば、1921年頃までの入学者の大半は中国留学生であったこと、1935年以降の増加分は台湾学生が占めて

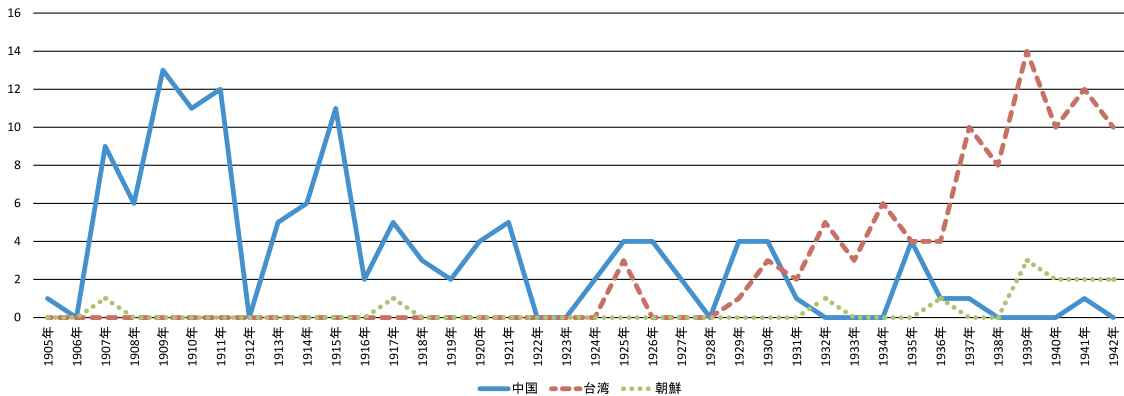
表2 長崎医専・医大の留学生年次別入学数（1905～1942年）



いたことが明らかになる。

台湾留学生の数が多かったことについて、『長崎大学医学部創立150年記念誌』（2009年）は「長崎医学校時代から台湾と本校の関係は深く、特に台湾の医療機関として最も重要な

表3 長崎医専・医大の留学生の出身地別入学者の変遷



県台北医院は医学校を併設していて、本校の卒業生川添正道（明治23年卒）や青木大勇（明治30年卒）がこの医院で活躍した。この二人は長崎医学専門学校教授に就任している。台湾からの本校への留学生は明治、大正、昭和と絶えることはなかった（p57）」と書く。2名の関係者が台湾と強い繋がりを持っていたがゆえ、台湾留学生が多かったという説明は首肯できる部分もある。ただ、実際問題としては、「台湾留学生が目に見えて増加したのは、昭和に入ってからである」と理解した方が史実としては適切と思われる。

2. 長崎医専・医大で学んでいた中国人留学生と千葉医専・医大留学生との比較

①国・地域別

長崎医専・医大および千葉医専・医大の全留学生の「国・地域別」、入学生、卒業生の数を、表4として掲げた。

まず、239名が「入学」した長崎医専・医大の国・地域別比率を示すと、中国が52%（124名）、台湾の40.2%（96名）、朝鮮が5.4%（13名）、以下、「満州」1.7%、トルコ・イタリア各0.4%だった。一方、千葉医専・医大の留学生数は282名の「入学者」のうち、中国が78.3%、朝鮮が11.7%、台湾9.6%、「満州」0.4%だった。さらに、戦前期の留日学生は、東アジア出身者が主体であったのに対し、長崎ではトルコおよびイタリアの学生が各1名学んでいたことには驚かされる。どのような経緯で留学したのであろうか。

さて、千葉で医薬を学んでいた留日学生においては、中国人の比率が圧倒的に高かったのだが、それは1908年から15年続いた「五校特約」のためである。それに対し、長崎は台湾留学生比率が高く、朝鮮留学生比率が少ないという相違がある。台湾留学生の数が多いう理由について、「長崎大医学部150年誌」の叙述を先に紹介した。

ところで、台湾に戻った留日経験を持つ医師の出身校を整理した研究がある。それを表5として示した。この研究は台湾の医師3397名のうち、1140名を元留日医学生とし（全体比34%。同書446頁）、留学先も示している。その最多校は、東京医学専門学校の212名だった。注目されるのは、7位までが私学で、8位によく官立の名古屋帝大医学部が登場

表4 長崎医専・医大の留学生の国別等一覧（1905～42）

国・地域	医薬別	入学者	卒業生	卒業率	中退者	卒・退不明
中国	医学	88	72	84%	15	1
	薬学	36	24	67%	12	
	計	124	96	79%	27	1
台湾	医学	68	39	98%	1	28
	薬学	28	20	95%	1	7
	計	96	59	97%	2	35
朝鮮	医学	10	3	75%	1	6
	薬学	3	2	100%		1
	計	13	5	83%	1	7
「満州」	医学	4	4	100%		
	薬学					
	計	4	4	100%		
トルコ	医学	1	1	100%		
	薬学					
	計	1	1	100%		
イタリア	医学					
	薬学	1	1	100%		
	計	1	1	100%		
計	医学計	171	119	88%	17	35
	薬学計	68	47	78%	13	8
	計	239	166	85%	30	43

注記：卒業率を算出する際、卒業・中退不明者は母数から引いている。

参考：千葉医専・医大における在籍留学生の特色（1899～1947年）

地域名	医薬別	入学者	卒業生	卒業率	中退者	卒・退不明
中国	医学	162	113	72%	45	4
	薬学	59	50	85%	9	
	計	221	163	75%	54	4
台湾	医学	12	6	60%	4	2
	薬学	15	15	100%		
	計	27	21	84%	4	2
朝鮮	医学	30	21	72%	8	1
	薬学	3	1	33%	2	
	計	33	22	69%	10	1
「満州」	医学					
	薬学	1				1
	計	1				1
計	医学計	204	140	71%	57	7
	薬学計	78	66	86%	11	1
	総計	282	206	75%	68	8

注記：卒業率を算出する際、卒業・中退不明者は母数から引いている。

表5 台湾医学者の日本留学先

	校名（現在）	人数	百分比
1	東京医学専門学校（私立東京医科大学）	212名	18.6%
2	昭和医学専門学校（私立昭和大学医学部）	135名	11.8%
3	岩手医学専門学校（私立岩手医科大学）	108名	9.5%
4	日本大学医科（私立日本大学医学部）	86名	7.5%
5	東京女子医学専門学校（私立東京女子医科大学）	67名	5.9%
6	日本医科大学（私立日本医科大学）	64名	5.6%
7	九州医学専門学校（私立久留米大学医学部）	63名	5.5%
8	名古屋帝大医学部	40名	3.5%
9	長崎医科大学	34名	3.0%
10	九州帝大医学部	30名	2.6%

下鳳奎『日治時期 台湾留学日本医師之探討』（2011年、p107）から作成

し、ついで長崎、九大の順であったことである。長崎の数は34名とされている。私が作成した表1によれば39名の卒業生がいたことになっているのだが、数字の異なりに関する詳細な検討は後日としたい（ちなみに、同書では、千葉医大の卒業者は4名のみとされているが、筆者のまとめによれば、入学者は12名、卒業できたのは6名となる⁽⁷⁾）。

朝鮮留学生については、長崎が、千葉に比して地理的に近いことは言うまでもないのだが、相対的に少なかったのは何故であったのか。これについては、九州の拠点校であった九州帝国大学の数値などと比較して、考察する必要があるだろう。

さて、中国留学生の受け入れに限定すると、長崎の中国留学生は124名（専攻生を除くと118名）となり、千葉医専・医大には数で劣るものの、中国留学生を受け入れた代表的な学校であることを改めて確認できるだろう⁽⁸⁾。

②入学年次別

長崎への新入留学生の年次別一覧については、表2で示した。1910年代半ばまでは、中国留学生がメインだったのに対し、1935年以降は台湾が急増することは、既に触れた通りである。

一方、千葉はどうか。ここで、グラフ等を示す事はしないが、「五校特約」の時代（1908～1922年）は毎年中国学生が10名前後入学していたが、その後は5～10名程度で推移する。1938年から1942年までは台湾学生が3～4名入学してきたため、中国留学生数を若干上回ることになるが、長崎ほど極端に台湾留学生が増えることはなかった⁽⁹⁾。

③帰国後の職業など

千葉医専・医大の元留学生については、『同窓会名簿』を含む関連史料を可能な限り渉猟し、帰国後の社会的な活動について細かく分析を行った。その概要を示せば、まず、帰国後の職業が判明したのは269名であった（職の遍歴をそれぞれ「1」と数えた延べ数）。その中で最多の職業は医学校教員で72名（27%）であった。以下、勤務医57名（21%）と開業医56名（21%）、軍医42名（16%）などが続いた。

医学校教員が多くなった理由は明確である。すなわち、清末から民国初期の中国社会は漢方医学（中医学）が主流であり、西洋医学の病院や医学校が少なかった。そこで、日本などで西洋医学を学んだ人たちが地方政府の力を借りて、続々と医学校を建設し、その教員に収まり、若き医学者の育成にあたったためである。1912年設立の北京医学専門学校（のち北京大学医学部）や浙江省立医学専門学校（のち浙江大学医学部）などは、とりわけ元留日学生が多かった。後者は千葉出身者が少なくとも5名「校長」に就き、最盛時には教員の過半数が千葉のOBであった⁽¹⁰⁾。

翻って、長崎医専・医大で学んだ元学生たちの就職先である。本稿で用い得た史料は、『長崎医学専門学校一覧』、『長崎医科大学一覧』および『日本留学中華民国人名調』（1940年）である。しかし、これらにも、「卒業生の現職」を記す欄があるため、66名の職業名が判明する。

この66名の職業とその人数を示すと、勤務医33名、医学校教員18名、開業医8名、政府・官庁8名、その他5名となる（1名が複数の職業に就いた場合はそれぞれ「1名」と数えた延べ数で、総計「72名」としている）。全体比で言うと、勤務医が46%、医学校教員が25%となる。千葉の事例と比べると、勤務医の比率が高いが、33名の中には県立長崎病院勤務3名、慶応大学病院1名のように、まだ日本国内で働いていたOBも含まれている。一方、中国に戻った医学校教員では、北京医学専門学校に5名、浙江省立医学専門学校教授が3名、江蘇省医学専門学校に3名、直隸省保定医学専門学校2名など、千葉と同様に、地方政府が創設した医学校で教鞭を取った人士が多かったことが確認できるのである。

④辛亥革命時の「留日医薬学生紅十字隊」

1911年10月に武昌（湖北省武漢市）から始まった辛亥革命は留日学生にも大きな影響を与えた。千葉医専の学生たちは革命派に与したい思いが強かったが、革命軍・官軍の別なく救命医療を行う「紅十字隊（赤十字隊）」を組織し、大陸に赴くことを決意する。千葉医専校長の荻生録造は「赤十字こそ世界文明精神の発露である」と、無償での緊急医療講座を開くなど、学校を挙げて支援した。留学生たちは大陸で救命活動に従事し、戦いの帰趨が明らかになった翌年春には、ほとんどが学校に戻り、修学を続け、卒業していく。そして先に触れたように、多くは西洋式医学校の教員となり、後進の育成にあたったのである。千葉医専留学生たちは、紅十字隊の支援に対する感謝の「記念碑」を1912年に立てるが、それは近代日中に存在した友好の証として今も医学部構内に残っている⁽¹¹⁾。

千葉医専の学生たちは、日本各地で医薬を学ぶ留日学生に紅十字隊への参加を求め、留日中国学生紅十字隊を組織する中心になった。また、在日華僑に義援金を求める檄文も作成している。実は、こうした千葉からの働きかけに、長崎医専の留学生たちが呼応し、参加している。

長崎大学医学部が発行した『長崎医学百年史』（1961年）には、この件について「（1911年）十一月十六日、中国における革命軍の蜂起に当り、清国留学生三十名は長崎を出発したが、翌年一月一日、中華民国が成立したのである（P 709）」とだけ記されている。

しかし、中国近代史研究者の川島真氏は新聞資料などを用い、詳しい状況を明らかにしている⁽¹²⁾。一方、筆者はそれ以外の新史料も確認しているため、長崎医専留学生と紅十字隊については、別稿で論ずる用意をしている。

おわりに

長崎医専・医大で学んだ外国人学生は1942年までで、239名にも上ることが明らかになった。ただ、今回の拙稿は、原則的に『長崎医学専門学校一覧』および『長崎医科大学一覧』の各年版および『日本留学中華民国人名調』に基づいた整理に留まる。長崎大学医学部の同窓会名簿や外務省史料などと照らし、より完全なものに仕上げることが喫緊の課題となる。

本稿は、戦前期中国で活躍した医薬関係者の留学先の第一位であったとされる千葉医専・医大の留学生について整理した筆者が、その第二位とされる長崎医専・医大留学生の動向について、粗々ではあったが、大掴みにしたものである。さらに第三位の東京帝国大学医学部、四位の東京医学専門学校、五位の東京女子医学専門学校、六位の九州帝国大学医学部などについても、同様の整理を深めていくなかで、近代日本で医学薬学を学んだ中国留学生の動向を考察し、近代日中の文化交流の一端を捉える方向を目指していきたい。

【付記】本研究は、JSPS科研費（2017年～2019年、基盤B・一般、課題番号17H02686 代表者 神奈川大学・孫安石）「教育の交流と東アジア国際関係—中国人留学生の派遣と支援」の助成を受けた成果である。

注

- (1) 『同仁医学』1930年9月号（見城『近代日本で留学生は何を学んだか—医薬・園芸・デザイン・師範』日本経済評論社、2018年、p76）。
- (2) 国立国会図書館デジタルコレクションに収められているものを使用した。そこに見える最後の発刊年次は1942年となっているが、他大学等にも1943年以降の所蔵はないため、この年が最後の発刊になったと思われる。
- (3) 『長崎医学百年史』長崎大学医学部、1961年、『長崎大学医学部創立150年記念誌』長崎大学医学部、2009年。
- (4) 『千葉大学医学部創立135周年記念誌』千葉大学医学部、2012年。

- (5) 『長崎医科大学一覧 昭和10年』、pp87-89。
- (6) 小島淑男『留日学生の辛亥革命』（青木書店、1989年）は、李喜所『近代中国的留学生』（人民出版社、1987年）を典拠として、この数値を示している。さらに、小島は1908年～1911年の留学生数を、08年：5,500名、09年：5,200名、10年：4,000名、11年：3,200名と、新聞史料を典拠に推計している。
- (7) 卞鳳奎『日治時期 台湾留学日本医師之探討』（台湾・博揚文化事業有限公司、2011年）は、台湾で発刊されている『台湾医師名鑑』（1954年）を用い、それらの数字を確認している。また、前掲、見城『近代日本で留学生は何を学んだか』 p28、も参照のこと。
- (8) 日本の各学校で学んだ中国留学生の全数値については、各学校の『一覧』で改めて確認し、『同仁医学』のデータ（そもそもこの資料は1929年頃までのものであった）と比べる必要がある。それにより、千葉が一位、長崎が二位云々についての否かの確定ができるであろう。
- (9) 前掲、見城『近代日本で留学生は何を学んだか』 p30。
- (10) 前掲、見城『近代日本で留学生は何を学んだか』 pp69～75。
- (11) 小島淑男、前掲『留日学生の辛亥革命』、前掲、見城『近代日本で留学生は何を学んだか』第六章。なお、見城「辛亥革命と千葉医学専門学校留学生」『中国研究月報』769、2012年3月号。中国語に翻訳されたものとして、「辛亥革命与千葉医学専門学校留学生」『辛亥革命与亜州』社会文献出版社（中国・北京）2015年、も参照されたい。
- (12) 川島「長崎から見た辛亥革命」（辛亥革命百周年記念論集編集委員会編『総合研究 辛亥革命』岩波書店、2012年）、川島「長崎から見る近代日中関係史」『日本史研究』630、2015年2月。